

【香川ファイブアローズ賞】

家族として、そして一人の人間として

高松市立香東中学校 一年 田邨 尚

僕には、知的障害のある兄がいる。年齢は僕より五つ上だが、知的発達の度合いは小学校低学年程度だ。兄は人懐っこく、笑顔が多く、知らない人にも話しかけていくくらいおしゃべり好きだ。僕はそんな兄をすごいなと思っている。しかし、兄と一緒に生活する中で、社会の中にある見えない壁や色んな形の偏見を感じてきた。

小さいころ、兄と一緒に公園に行くと、人見知りをしない兄に、同じくらいの年齢の子どもは不思議そうな目で、そのお父さんやお母さんは不審そうな目で兄のことを見たり、ひそひそと話したりすることがあった。兄はそれに気づかず楽しそうに遊んでいたが、僕は胸がしめつけられるようななんともいえない気持ちになった。何も悪いことをしていないのにただ、「普通」と違うというだけで、距離を置かれてしまう。その理不尽さを今でも感じることもある。

兄の年齢が上がるにつれ、身体も大きくなると、周りの反応はもつと複雑になった。兄と一緒に買い物をしていると、店員が僕だけに話しかけ、兄には視線を向けないことがあった。あるいは、兄の行動に少し時間がかかると、後ろに並んだ人があからさまにため息をつくこともあった。そのたびに、「兄は一人の人間として尊重されていない」と感じた。僕にとって兄はかけがえのない家族であり、兄の笑顔や何気ない優しさは何物にも代えがたい。しかし、社会の中では、その価値が正しく見られていないように思えた。

法律では、障害がある人の人権は守られている。日本では「障害者差別解消法」によって、不当な差別の禁止や合理的配慮の提供が定められている。だが、制度があっても、日常生活の中でそれが十分に行

き届いていないことが多い。特に知的障害の場合、見た目にはわかりにくいいため、周囲からの理解や配慮がえられにくい。兄が困っているも、「なぜ助けが必要なのか」が他人に伝わらないことがある。

僕は、知的障害のある人が生きやすい社会を作るためには、制度だけでなく「理解を広げるための教育」が必要だと思う。小学校や中学校の授業で、障害について学び、実際に交流する機会を増やすことでその人のことを一人の人間として知ってもらうことが大切だと思う。実際、僕の小学校でも特別支援学級の生徒と合同で行事をしていた。その時、友達が「思っていたイメージと違った」と言っていた。知識や経験が偏見を減らすのだと実感した。しかし、僕の兄は小学校までは特別支援学級に所属していたが、中学校からは支援学校に通うことになった。そうになると、健常者と関わることがほとんどなくなってしまふのだ。もっと社会の人たちと関わる機会があれば兄のことを知ってもらえるのになと思う。

家族としての日常には、喜びと同じくらい苦労や不安もある。兄は簡単なたし算や引き算もできない、お金の価値や計算もできない、言葉足らずになるためコミュニケーションが難しい、交通ルールが理解できない、自転車に乗れない等、日常の中でも仲介やサポートが必要だ。両親は、そのサポートを当然のこととして行っているが、社会の理解がないと、その負担はさらに大きくなる。例えば、役所での手続きや病院での説明などは、専門用語や難しい文章が多く、兄が自分で判断することは難しい。そのため、家族が常に付き添う必要がある。もし、もっと分かりやすい言葉や視覚的な説明が普及すれば、兄のような人も自分で選択し、自分の人生に責任を持つ機会が増えるはずだ。

僕が一番大切にしたいのは、「兄を特別な存在ではなく、一人の人間として尊重する」ということだ。知的障害があっても、兄には好きなものがたくさんある。兄はガンダムが大好きで、ガンダムの知識は相

当なものである。大人の男性にガンダム好きが多いが、対等にガンダムの話をしている。ガンダムの知識はユーチューブや本からのようだ。ガンダムについて一緒に会話をした人が「すごいよく知っているね」と感心すると、兄はとても嬉しそうにする。その笑顔を見ると、兄が社会の中で認められ、誇りを持って生きられるようになればいいなと強く思う。

障害のある人の人権を守ることは、家族だけの努力では限界がある。地域や学校、職場など、社会全体が理解と配慮を持つことが必要だ。僕自身も、兄と共に生きる中で、多様性の豊かさや人とのつながりの大切さを学んできた。

これから先、兄が自立した生活を送るために、兄が周囲に受け入れられ、尊厳を持つて暮らせる社会であってほしいと願う。そのために、僕は身近な人に障害への理解を広める努力を続けたい。